



洋上アルプス

No.344 2023年12月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は
こちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1
TEL 0997-42-0331



令和5年度 松枯れ対策連絡協議会を開催（10月3日）

当保全センター会議室において令和5年度松枯れ対策連絡協議会屋久島支部会を関係機関より19名が参加して開催し、各機関から令和4年度における事業実績及び令和5年度の現状と対応（予定を含む）について報告を受けました。

また、森林総合研究所九州支所の金谷整一主任研究員から、絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの衰退と保全等についての説明を受けました。

屋久島森林管理署及び当保全センターとしては、今後も関係機関と連携協力して、松の保全対策を講じていく考えです。



対応と今後の対策について意見交換

神山小学校で森林教室を実施（10月23日）



木を伐ることの重要性についての説明

神山小学校の3学年17名に対し、屋久島森林管理署及び当保全センターで森林教室を実施しました。

当日は、木を伐り、森を育てていくことの大切さや木材を使うことの重要性についての講義を行いました。さらに、木材を使うことの一環として、地域の伝統的な妖精「げじべえ」の作成を行うとともに、林野庁作成の冊子「森とくらし」及び鉛筆の配布も行いました。

当初、木を伐ることは悪いことだと大半の児童が考えていましたが、森林教室終了後には、ほとんどの児童が木を伐り、山を育てていくことは大切なことだと認知してくれていました。

屋久杉巨樹・著名木の再調査を完了

屋久島の世界自然遺産登録30周年記念行事の一環として、各関係機関が連携して令和4年7月より実施してきた屋久杉巨樹・著名木調査が、令和5年10月で終了しました。

この間、屋久杉自然館発行の「屋久杉巨樹・著名木」に掲載される37本（倒木等含む）を中心に47本について、位置情報、大きさ、着生木、周囲の植生等の調査を実施し、データとして残すことができました。

調査結果の一部は11月25日に開催された屋久島世界自然遺産登録30周年記念事業の中で公開され、今後当保全センターHPで公表予定です。



縄文杉の調査

令和5年度林業・技術交流発表大会（11月1日～2日）

くまもと県民交流パレアにて令和5年度 森林・林業の技術交流発表大会が開催されました。

今回は、屋久島森林管理署より1名、ウッドショップ木心里及び子育て支援tetoteから各1名の計3名で参加し【森林と地域の人々をつなぎ子ども達の心を育む木育の取組】という課題名で民間の方々との共同発表を行いました。

発表の内容は、幼児を対象に国有林をフィールドとして実施した川上から川下への木材流通や林業の歴史・生態系についての体験学習、国有林野内の副産物・支障木を活用した商品開発、森林環境譲与税を活用した「誕生児への木材製品贈呈事業」の取組等の実施報告を行い今後の目標等を発表しました。

結果は優秀賞という好成績で、今後もこの活動を継続し屋久島の林業を未来の子ども達に受け継ぐとともに、川上から川下へと森林と地域の人々をつなぐという目標を再確認し技術交流発表大会を終了しました。



共同発表の様子

屋久島世界自然遺産登録30周年記念シンポジウム開催（11月25日）

屋久島離島開発総合センターにおいて、屋久島世界自然遺産登録30周年記念シンポジウムが開催されました。

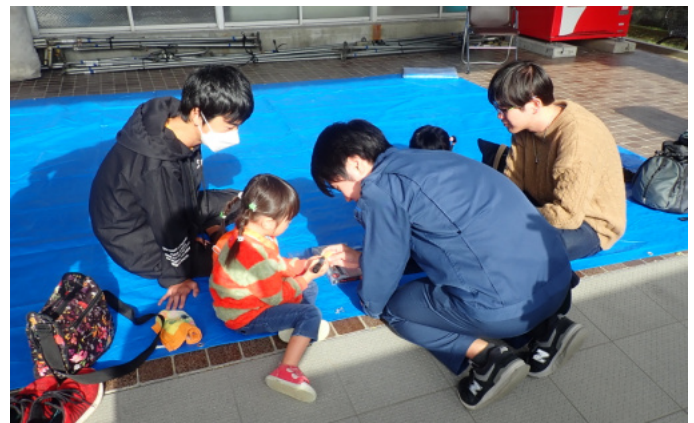
屋久島森林管理署及び当保全センターは、木工教室及び屋久杉巨樹・著名木の3D映像や調査の際に撮影した写真のパネルを展示しました。

当日は、快晴の下、屋久島町内外から大勢の参加者で大変な賑わいでした。

特に、木工教室においては、先着50名の子ども達が木製ストラップや屋久杉のコースター及び屋久杉の箸を制作するなど貴重な体験を喜んでいました。

また、屋久杉巨樹・著名木の3D映像をコントローラーを使っていろんな角度から見る事ができる体験コーナーでは、子ども達だけでなく、大人の方も普段は見られない屋久杉の巨樹・著名木に興味深く操作を楽しんでいました。

当保全センターでは、これからも関係機関と連携しながら、このようなイベントを通じたPR活動を行っていきます。



(上) 木工教室 (下) 屋久杉巨樹・著名木の3D展示

屋久島の山々とカタツムリたち（その3）

— 屋久島の高山湿地に生息する米粒サイズの二枚貝 —

香川 理（筑波大学下田臨海実験センター 特別研究員）

花之江河と小花之江河は、標高1600m付近に位置する国内最南端の高層湿地である。私がこのエリアに着目する理由は突如開けた湿地帯のその景観の素晴らしさもあるが、貝類を研究する身としてここにしか生息しない小さな二枚貝ハベマメシジミに興味があるためだ。

ハベマメシジミは貝殻の大きさが4mmほどの米粒ほどの二枚貝である。屋久島に詳しい人であればこのハベマメシジミの存在を聞いたことがある人もいるだろうが、花之江河、小花之江河は生物の採集が法的に禁じられているため、貝類研究者でもその実態を知っている人は少ない。したがって、その生態が不明であることはもちろんのこと、発見から現在までに正式な種として学術誌に記載されていないいわゆる未記載種でもある。

そこで私は、東北大学で貝類の研究をする同僚や後輩、先輩の協力のもと*1、各省庁から許可を取得し、小花之江河にてハベマメシジミを採集した。そして、このハベマメシジミの実態を探るため、分子系統解析をおこなった。分子系統解析とはランダムに変異する遺伝子に着目し、それを比較することでその種がどのような仲間に属するか、その種を調べる上での基盤となる知見を提供する。また、私たちは屋久島の低標高地域での調査の際に、水田脇の水路からマメシジミ類を採集していたため、これとハベマメシジミが異なるかも興味があった。

分子系統解析の結果、ハベマメシジミの系統的な位置が特定され、ハベマメシジミがマメシジミの仲間のなかでも高い固有性をもつ可能性が示唆された*2。そして屋久島の低地で発見されたマメシジミ（チビマメシジミ）とは大きく異なるものであった。屋久島に入ってきた歴史的な経緯も異なると考えられ、高山地域を有する屋久島で、それらの生物がどのように形成されてきたかを知る上でも重要な結果であった。ただハベマメシジミが高い固有性を示したことは屋久島外の高山地域でのマメシジミ類のサンプリングが少ないことも

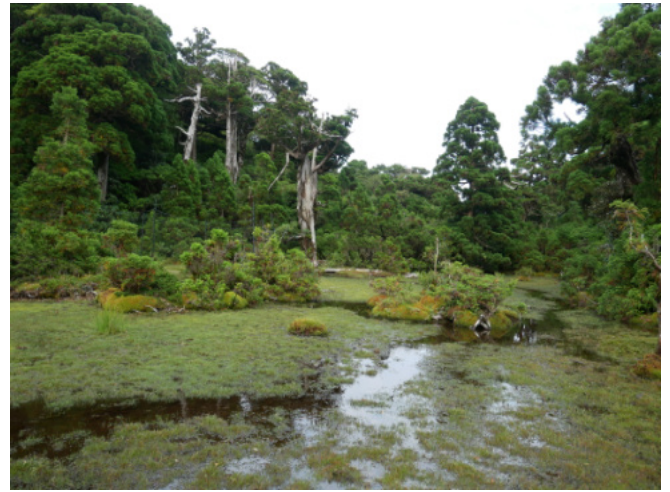


写真1 屋久島の高山湿地、小花之江河の風景。

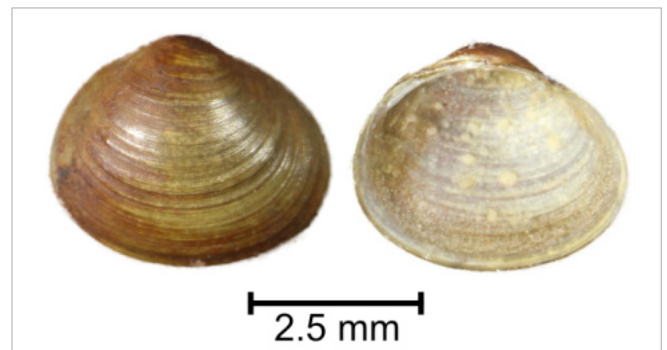


写真2 ハベマメシジミ

起因しているかもしれない。また種記載においてはいずれにしろ形態的な精査も重要であり、これらは課題である。

屋久島は雨が多いことで有名である。花之江河周辺の高層湿地はそんな豊かな雨によって2600年前から2800年前ごろに形成されたとされる。花之江河、小花之江河を訪れると誰もが屋久島の豊かな水資源を感じることができよう。そして湿地帯をわたす木道の下には、米粒ほどの小さな二枚貝が潜んでいることをひとつ忘れないでほしい。

*1) 研究メンバーは東北大学千葉聡研究室に所属していた伊藤舜氏、石井康人氏、藤本光志氏、齊藤匠氏である。本研究・調査に際して感謝申し上げます。

*2) Saito et al. 2022, Molecular Phylogenetics and Evolution



屋久島東部地域の垂直方向の植生モニタリング調査（令和3年度）

〔標高1235m愛子岳山頂の植生〕 確認種数：32種（平成28年度：27種）

R3（本年度） アカガシ、アセビ、アリノトウグサ、イソノキ、イッスンキンカ、ケイビラン、コケトウバナ、コツクバネウツギ、コメススキ、サツキ、サルトリイバラ、シシガシラ、スマレsp.、チャボシライトソウ、ヒカゲツツジ、ヒカゲノカズラ、ヒメカカラ、ミヤマビャクシン、ヤクシマカラマツ、ヤクシマコオトギリ、ヤクシマミヤマスミレ、アクシバモドキ（新規）、コガクウツギ（新規）、シキミ（新規）、シマサクラガンピ（新規）、スギ（新規）、トウゴクシダ（新規）、ハイノキ（新規）、ヒサカキ（新規）、ヤクシマキイチゴ（新規）、ヤクシマススキ（新規）、リョウブ（新規）

H28（5年前） アオヤギソウ、ヒメツルアリドオシ、チャボシライトソウ、イソノキ、ヤクシマコオトギリ、ヤクシマカラマツ、ヤクシマチャボゼキショウ、イッスンキンカ、センブリ、コツクバネウツギ、ツクシウスノキ（アクシバモドキの誤認か）、コケトウバナ（ヤクシマトウバナ）、アセビ、コメススキ、ヒカゲノカズラ、スマレ.sp、ヒメハギ、アリノトウグサ、ヒメカカラ、サルトリイバラ、ヤクシマミヤマスミレ、シシガシラ、ヒカゲツツジ、ミヤマビャクシン、ケイビラン、サツキ、アカガシ

◆前回調査との比較とヤクシカの影響 5年前に記録はあるが、今回の不確認種はアオヤギソウ、ヒメツルアリドオシ、ヤクシマチャボゼキショウ、センブリ、ツクシウスノキ、ヒメハギの6種、新規確認種は上に示した11種で、今回の確認種の合計は32種である。ツクシウスノキはアクシバモドキの誤認であろう。ヤクシマミツバツツジは平成18年度の調査から確認されなくなり、前々回（平成23年度）、前回（平成28年度）に引き続き、今回も確認することはできなかった。ヤクシカの影響は前回同様、糞や食痕は確認されなかった。しかし、新規に確認した植物のうち、シキミ、シマサクラガンピ、ハイノキ、ヒサカキはいずれもシカの不嗜好植物であり、シカの食害の影響を受けた種構成であることが考えられる。



愛子岳山頂の景観。ヤクシマススキの中にツツジ類が見える

グリーンサポートスタッフ（GSS）巡視記録より ～花と景色～

センリョウ（実）



センリョウは11月6日、白谷雲水峡でパトロール中に見つけました。

名の由来は江戸時代初期、実の数が多いので百両金（カラタチバナ）に対して千両としたとのこと。屋久島では11月ごろから実が色づき、お正月に万両（マンリョウ）などと飾られます。

カンツワブキ



カンツワブキは11月17日、太鼓岩までのパトロール中に見つけました。

世界で種子・屋久だけに生育する固有の常緑多年草とのこと。花はツワブキとよく似ているが、葉に鋸歯があることから区別できます。